The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	メディア授業による日本語学習者の学び
Author(s)	藤井, みゆき
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2021, 19, p. 63-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79306
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

メディア授業による日本語学習者の学び
Learning Japanese through Online Classes

藤井　みゆき

【要旨】

本稿では、2020年度春～夏学期のUプログラム[1)]で行った日本語学習のメディア授業について紹介し、その中で見られた学生同士の学び合いについて考察を行った。

４名の学生がインド、モンゴル、タイにてweb会議ツールZoom[2)]での同時双方向型授業に参加した。授業では、発音、漢字、語彙、文法、読解、聴解の教師主導の知識獲得を目的とする学習と、スピーチやディスカッションの学生による表出活動を含む活動を行った。その中で、相互の学習活動の手助け、クラスメイトから情報を引き出す学習ストラテジーの使用、自律的な学習につながる情報共有があり、それらが日を追うごとに増加していく様子が観察された。授業では、ディスカッションの方法や誤用訂正の仕方等、メディア授業ならではの特徴を活かした工夫も行った。

メディア授業は便利だが、反対に対面授業の良さも見えてきた。空間の移動をともなわない学習の機会の得失を考え、多様な学びの場があるといいだろう。

１．はじめに

近年、情報通信技術の発展にともない、インターネットとコンピュータ技術が教育の現場でも積極的に活用されるようになってきた。さらに、2020年は感染症の世界的流行によりますますその機会が増加した。大阪大学の日本語日本文化教育センターの学部前予備教育の授業でも、新型感染症の影響で学生たちの渡日が遅れ、春～夏学期に予備教育前の準備教育と位置づけられるメディア授業を行うことになった。

本稿では、web会議方式の同時双方向型で行ったメディア授業について紹介し、その中で観察された学生の学びについて考察を行う。

２．メディア授業について

本稿における「メディア授業」とは、文部科学省が定めた「多様なメディアを高度に利用した授業[3)]」のことを指す。「授業中、教員と学生が、互いに映像・音声等によるやりとりを行う」もので、「学生の教員に対する質問の機会を確保する」こととされている。

今回の授業は、Zoomによるweb会議システムを活用し、授業のリアルタイムのビデオ配信を行いながら、ブレイクアウトルーム（グループに分かれディスカッションを行う機能）、ホワイトボードとファイルの共有、チャット等の機能を用いて行った。

情報通信技術の発達にともない、学生のITリテラシーが高まってきている現状もあり、インターネットを媒介する学習の機会が増えてきた。今回はZoomの使用経験者は学生４人中１人であったため、授業開始前にメールで簡単な説明を送付し、自身で慣れてから授業に参加してもらったが、授業中操作方法がわからなくて活動が中断する等の問題は皆無であった。

教室では通常90分の授業を１日２コマ行う。そこでは、クラス全体がペアやグループに分けられたり、指名されて板書をしたりする等の学生の動きがある。しかし、メディア授業では、

基本的に座ったままの姿勢で終始授業が展開されるため、90分以上継続するのは困難だと思われた。そこで、今回は１日90分の授業を週２回行うことにした[4)]。

３．授業の概要

３－１　学生について

本授業に参加した４名の学生は、来年４月から国立大学の学部に入学する国費の留学生で、全員理系の専攻である。授業に先立ち、通信環境について、授業が可能な曜日と時間、課題について、日本語学習歴、日本語能力試験の受験レベル、学習方法、日本滞在・旅行歴、これまで学習した教材等を学生に尋ね、教師が授業の準備のための参考とした。

以下に彼らの背景についてまとめる。

表１　学生について

	出身国	日本語学習歴	日本語能力試験	学習方法	日本滞在・旅行歴
学生Ａ	インド	４年	Ｎ２合格	個人教授	なし
学生Ｂ	モンゴル	３年	Ｎ２受験予定	高校で３年	なし
学生Ｃ	モンゴル	３年	Ｎ２受験予定	独学	なし
学生Ｄ	タイ	１年３ヵ月	Ｎ３合格	独学	旅行で９回

３－２　授業の日程

６月から９月にわたって、ほぼ毎週メディア授業を行った。学習開始前から終了までの大まかな日程は、以下のとおりである。

５月末　　授業の実施にあたって、メールにて受講者の通信環境を確認し、これまでの日本語学習等について尋ね、教材や学習内容を決定した。
６～９月　メディア授業を実施した。
７月初旬　中間アンケート及びフォローアップ・インタビューを実施した。
９月下旬　終了アンケートの実施及び学習についての振り返りを行った。

３－３　アンケート及びフォローアップ・インタビューについて

後半の授業は学期の中間時点での学生の声を反映したものにしたいと考えていた。当初計画されていた授業実施期間は短期間が想定されていたため、７月の初旬に中間アンケートとフォローアップ・インタビューを実施した。アンケートの内容は、授業と自身の日本語能力の水準について、事前の課題の量、オンライン学習で不便に感じること、オンラインでの学習についての感想、クラスメイトと学習することについて、授業についての要望等であった。

９月の振り返り後の終了アンケートでは、オンライン授業の感想（長所と短所、不便だったことや困ったこと、オンラインでクラスメイトと一緒に勉強したこと等について）を尋ねた。

３－４　授業内容

授業は、発音・アクセント・イントネーションの確認、漢字、語彙、文法、読解、聴解の学

習を行う等の教師主導の知識獲得を主な目的とする学習と、スピーチやディスカッション等の学生主体の表出活動を含む活動に分けて行った。

知識獲得のための教材は、複数の日本語能力試験Ｎ２対策問題集や会話教材を用いた。事前に教師が課題をメールで送信し、各自で問題を解いたり未習の語彙や表現を調べたりして、授業では練習問題の解答及び解説を行った。

表出活動でのスピーチとディスカッションのテーマは、学習意欲の強化のため、基本的には学生の希望により決定したが、彼らから何も案が出ない時は、教師が用意したものを複数提示し全体で選択した。実際に扱ったテーマは、「将来の夢」「好きな本の紹介」「日本で旅行したい所」「好きな動物とその理由」「10年後の自分は・・」「時間とお金はどちらが大切か」「好きなテレビ番組やドラマについて」「死ぬ時に後悔すること」「もし、過去にタイムトラベルできたなら、いつの時代にどこに行きたいか」「好みの歌謡曲」「小学校からの英語教育」「AIと仕事」「自分を魅了する科学の概念」「関東と関西の違い」「日本は暮らしやすいかどうか」「ケンタのけが（ケンタのけがに関する文章を読み、最も責任があるのは誰かを問う内容）[5)]」「来日が決定してから、日本に来るまでで一番大変だったこと」等である。学生はテーマについて事前に語彙や表現を調べ、話すための準備を行った。ペアを組んでの表出活動では、しばしばブレイクアウトルームを活用した。

その他、ロールプレイ、絵を見てリレー形式で一つの物語を完成させる活動、動画を使った語彙学習や会話練習、七夕等の文化紹介等を行った。

４．考察

４－１　授業で観察されたこと

授業では、「学生同士の学習活動の手助け」、「クラスメイトから情報を引き出す学習ストラテジーの使用」、「自律的な学習につながる情報共有」が観察された。その中で最も多く見られたのが、「学生同士の学習活動の手助け」の「学習活動に参加するために環境を整える相互の手助け」であった。

具体的な手助けとして、マイクをOFFにしたまま発言を続けていた学生に、他の学生が「マイクが・・・」等と本人に呼びかけ、気づきを促す場面が多かった。また、自宅で参加していた学生Ｂに家族からの働きかけがあったのを画面で知った学生Ｄが、輪番で自分の担当部分の文章を読み上げた後に、「もっと進んだほうがいいかな」とつぶやき、自らの判断で読む箇所を追加し、学生Ｂが家族の人に対応できるように気遣いを示したこともあった。

他の「学生同士の学習活動の手助け」の、「言語学習活動の手助け」として、学生Ｂが用いた「遊牧民」という言葉に対して、学生Ａが難しくて他の学生が理解できないと判断し「nomad」とチャットに入力したことが挙げられる。学生Ａは他にも、教師が学生Ｃが用いた「膵臓」という単語に対して、「膵臓、難しい言葉ですね。」と言ったのを聞いて、チャットに「pancreas」と入力して皆に意味を知らせたり、「心当たり」の意味の説明の際に、「have no clue」と入力したりしていた。他にも、教師が学生Ａの発言の意味を確認するため「学校？」と尋ねた際に、聞いていた学生Ｃが「『過去』かな？」と学生Ａが伝えたかったことを代弁した場面が観察された。また、練習問題の文中の漢字の読み方がわからなくて戸惑っている学生がいると、読み方を教え合う場面もしばしば見られた。

オックスフォード（1994）は言語学習の際の様々なストラテジーを示しているが、「学生同士が協力する」ことを「社会的ストラテジー」の一つと位置付けている。今回のメディア授業では、学習の場で漢字の読み方等の情報伝達が行われたのみならず、学生同士が目標を同じくする社会性を持った共同体のように手助けを行っていたと考えられる。

他に、「話すことと書くことの限界を克服する」ために「助けを求める」ことは、「補償ストラテジー」の一つとされている。実際の「クラスメイトから情報を引き出す学習ストラテジーの使用」としては「石油」の意味がわからなかった学生Dの「誰か助けて」という呼びかけに対し、学生Aがチャットに「oil」と入力した場面が見られた。

また、「自己モニターをする」、「質問をする」といった学習ストラテジーも観察された。その方法は自己完結で行われたり、学生が教師に行ったりするものもあったが、全体的には学生同士のやりとりの頻度が高かった。

次に、「自律的な学習につながる情報共有」について言及する。授業後、学生Aが「質問があります。授業とは関係ないけど、皆に聞きたいです。課題をしても時間が余る。皆は何をしている」と問いかけ、学生同士の交流が始まったことがあった。学生Cは「ずっと勉強したら、ストレスがたまるから、週に2、3回はテレビを見る」と答え、学生Dは「何もしていない」と回答した。さらに、学生Bが「漢字が苦手だから、漢字の問題集をしている」と続けた。教師が「どんな問題集を使っていますか」と尋ね、学生Bに複数の教材を紹介してもらい、教室外での学習につなげる努力をした。これは7月中旬の出来事で、仲間意識が芽生えていたとも捉えられ、学生の渡日前の情報を積極的に得たり共有したりしようとする気持ちが表れている。教師との1対1の授業が行われていたとすれば、見られることがなかったと思われるやりとりに、切磋琢磨する学生の姿が垣間見られた。渡日して日本語を学習するという共通の目的を持ち、授業に参加してはいるものの、情報が乏しい環境において離れた場所で不安が募り、メディア授業の場が一種のコミュニティのような情報交換や感情を共有する場になっていたのかもしれない。

また、「自分を魅了する科学の概念」というテーマで、各学生に関心がある分野をわかりやすく説明してもらった際に、学生Aの一般相対性理論の話と学生Cの災害対応ロボットの話を聞いた学生Dが「今日ではなくて来週話してもいいですか。簡単にしか準備していませんでしたが、他の人の話を聞いてもっと調べてから話したいと思いました」と言い出したことがあった。他の学生に刺激を受け、より積極的に学習を行おうとする意欲に結びつき、その結果授業後の自律学習につながったことが予想される。

授業の他に、学生の学習への意欲を引き出すことと、情報共有や情報を補足する手段としてPadlet[6)]を活用した。Padletは、掲示板のような場に複数の人が文字、写真、リンク先等を貼り付けて情報を共有することができるオンライン上の交流の場である。中間アンケート実施以降に、Padletの使用を開始した。教師が「NEWS WEB EASY」、「NHK for school」、「大阪大学箕面キャンパスのガイド」、「授業のディスカッションの補足資料」等の情報を提供した。投稿数は18回であった。一方、学生達はチャット機能を使って他の学生に呼びかけたり、次回のディスカッションのテーマの確認や補足を行ったり、好きなアーティストやドラマの紹介をしたりする等の投稿を行い、その数は8回だった（資料参照）。投稿は強制せず希望者が好きな時に利用したので、全ての学生が投稿したわけではないが、学期終了後にも記事の追加が見られ、

学生の学習意欲を引き出す目的を果たすことができたと言える。
上記の学生間の助け合いや交流は日を追うごとに増加していく様子が観察された。

4－2　アンケートで得られた学生の回答についての考察

ここでは、中間アンケートで得られた学生の回答を抜粋して紹介する。
不慣れなオンライン授業で不安に思っていないかどうかを心配し、「大学の教室ではなく、クラスメイトと一緒にオンラインで学習することについて、どう思いますか」と問うた設問には、全員が肯定的な回答をした。具体的には、次のとおりのものがあった。アンケートで得られた学生からのコメントは原文のまま記載する。

・面白い経験です。海外の人と初めてこれほど交流したことがあります。授業がよく行われて、皆が参加がし、いい環境だと思います。
・前にオンラインで勉強したことがないので新しい経験ですからいい機会と思います。
・少し不便カメラがありませんのですが、あとは大丈夫です。
・初めてちょっと変だったけど、今慣れてきた。

最後の「ちょっと変だった」という回答について、フォローアップ・インタビューで学生Ｂに詳細を聞いたところ、「一緒に授業に参加しているのに、クラスメイトが隣にいないので、はじめは慣れなくて変な感じがした」そうだ。
文化庁の調査研究（2003）の中で西原は、インターネットを媒介とする学習について、「あくまでも疑似空間としての画面上で展開する学習であるため、双方向的な学習といっても生身の人間相手ではないという制約を受け入れなければなりません[7)]」と述べている。授業で学生Ｂが感じた感覚もまさに同様で、血が通った人間同士が実際に会って直接言葉を交わすという形式のコミュニケーションの重要さを再確認させられた。我々教師も含め初めてWeb会議システムを使用する人は、最初は彼同様に違和感を覚えることが多いのではないだろうか。比較的ITの使用に慣れている世代だと言われている彼らにとっても、人によっては違和感を覚えずに画面を通して教師やクラスメイトと外国語でコミュニケーションをとることに慣れるのに時間がかかる人がいると思われる。
また、同アンケートの「複数のクラスメイトと一緒に学ぶことについて、どう思うか」という問いには、以下のような回答が寄せられた。

・４人で勉強するのは確かに一人で勉強する事よりいい経験です。学校とか塾とかの感じをします。
・一人で勉強するより皆で勉強するほうが楽しいです。
・もともとはクラスで日本語を知ったことがありませんので楽しです。
・私はいいだと思います、ほかの人と話ができますから。

これまで独学や個人教授という形式で学習していた学生が４人中３人いたためか、初めて同じ志で共に学ぶ人が現れ、グループでの学習を楽しんでいる様子がうかがえる。

また、「一人での勉強と皆で一緒に勉強することは、どう違いますか」という設問でも同様に以下のような声が聞かれた。相互に学習動機を高め合っていることがわかる。

・皆と一緒に勉強して、たくさん習えることがあります。こうやって、私はいろんな人でたくさん学びました。
・一人で勉強する時眠くなりやる気がなくなることが多い、皆で勉強するする時全員で頑張って勉強して話しているからそんなことが起こらない。
・前に日本語で人と話す機会がなかったので色々勉強させています。皆で勉強したら問題についてい色んな意見がでてくるので問題をもっとわかると思います。
・一人での勉強は少し寂しいだと思います。

次に、学期終了時のアンケートで得られたオンラインでの授業の感想と長所を以下のとおりまとめる。文は原文のまま記す。

・場所と時間を構わず勉強できたので、良かったと思います。
・おんらいんだからどこでもできていた。田舎に行ってもインターネットがあって授業できました。
・漢字、文字語彙

場所を選ばずインターネットに接続できさえすれば授業に参加できるというメディア授業の長所をよく捉えている。

「漢字、文字語彙」については、今回の授業では比較的自主学習が行いやすい漢字と語彙の授業にあまり時間を割かなかったが、苦手な学生にとっては学習の機会が少しでも得られて達成感があったのかもしれない。

一方、短所としては、以下の声が聞かれた。

・進む速さがちょっとおそいと思いました。

今回受講した学生間には日本語能力の水準の差が見られ、中間に位置付けられる学生Ｃから得られた回答である。習熟度に少し差が見られた学生Ｄを気遣い、教師がやや遅めの進度にしたことが学生Ｃにそう感じさせたのかもしれない。また、練習問題では、正解ではない選択肢についても情報を与えたので、それが進度が遅いと感じさせた原因かもしれない。他の学生からは同じ声が聞かれなかったので、個人の学習ペースの差とも捉えられないこともない。

・発音、文法

今回の学生は、外国で、且つ教室で学んだのではないにもかかわらず、学生Ａ以外は発音に癖がなく比較的自然なイントネーションで発話をしていた。授業を開始したはじめの１カ月は、毎回の授業で、５分から10分程度時間を割き、単語の発音（促音、撥音）とアクセント、母音

の無声化、イントネーション等をとりあげ練習を行っていたが、４名中３名の発音は訂正箇所が少なく、１名のみその頻度が高くなる傾向があった。教室での学習ならば、授業の前後に特定の学生に対して個別に発音練習を行うことはたやすいことだが、メディア授業で一定の時間が設定されていて皆で共有している画面で発音練習を行うことに限界を感じた。その結果、全体的な発音の確認の時間は設けたものの、個別に対応する時間が減少した。得られた回答は、発話に不慣れな学生Ａから「発音をもう少し練習させてほしい」という要求とも受け取れる。

「文法」については、回答者に直接尋ねる機会がなかったため理由は特定できないが、他の学習項目と異なりメディア授業で時間を長く割いたので冗長的になりがちだったかもしれない。今後機会があれば、原因を探り扱い方を工夫したい。

その他、授業の頻度についても次のような意見があった。今回のメディア授業の時間数にはかなり制限があったので致し方ない。

・１週間に２回だけだったから教室の勉強より少ないだった。

最後に、「オンラインでクラスメイトと一緒に勉強することについて、どう思いましたか」という質問に対する回答は、以下のように全て肯定的な意見が占めた。教室内で頻繁に見られる学生同士の学びは、メディア授業でも活発に行われることが確認された。

・他の国の人と勉強したことがなかったのでいい経験だったと思います。
・とても良い経験だったと思います。初めての外国人との交流でした。また、日本語のみで話したりするので、能力も成長したと思います。
・面白いとおもいました。初めてやっていたから。
・人気がいい人です。

４－３　メディア授業について

これまで多くの日本語教授者がICTに関する能力を発揮する頻度は必ずしも高くなかったが、社会情勢により、考え方の変更を余儀なくされた。今回メディア授業の前に、自ら教授環境を整え、学生にも環境整備を呼びかける必要があった。これまで教師は学びの場にさほど努力をせずにアクセスが可能だったが、メディア授業が行われている期間は容易にそこに辿り着けなくなってしまった。普段はあまりしない授業日程の調整、学生との事前の連絡、メールでの教材の送付や対応も行わなければならなかった。さらに、授業に必要な最低限のIT技術の習得にも追われた。近年ICTを活用した日本語教育について議論されることも多くなってきたが、これまでは得意な人がその技術を積極的に使っていた傾向があり、筆者自身この技術の習得の必要性をこれほど切実に感じたことはなかった。このように、これまで教師として求められてきたものとは異なる技能が必要になり、戸惑った人も多いはずだ。技術の発展に加え、学生の地理的な広がりや学習方法の多様化もあり、今後も教師に一定の情報通信技術の習得が求められることが予測される。今回のメディア授業は、対面授業と比べると、明らかに授業の前の作業の負担が大きかった。今後同様の授業を行う機会があれは、授業の在り方を考察し事前準備を計画的に行う等作業の効率化を図りたい。

また、今回実際にメディア授業を行ってみて、教室で学生と接する以上に、視覚情報を大切にし学生の反応を注意深く観察したり、声がけを意識したりする等の配慮が欠かせなかった。カメラが付属していないコンピュータを使用して授業に参加していた学生や時折消画の人もいたので、画面のみを頼りに学生の様子を把握することに限界があると感じた。

一方、今回のメディア授業で利点だと気づいたこともあった。たとえば、教室で賛成と反対の立場に分かれて議論を行う際に、はじめに賛成同士と反対同士の学生がペアを組み、次に、賛成の人と反対の人をペアにして議論の場を設ける活動を行うことがあるが、異なる立場のグループの話し合いの内容が相手に聞こえてしまうのではないかと、教師は気を遣うことが多い。しかし、今回のメディア授業では、対立する２つの意見を扱う際に、Zoomのブレイクアウトルームを用いることによって他のグループの声を完全に遮断することができた。

また、チャット機能による日本語の誤用訂正の方法の使い分けも有効だった。クラス全体で共有したい誤用は全員に向けて示した。一方、学生Ｄの発話に基本的な活用の誤りがしばしば見られ、本人には伝えたいものの皆の前で何度も訂正を行いたくなかったので、必要なタイミングで本人に限定してメッセージを送信し活用の確認を促した。教室で同様のことを行うのは困難であるが、メディア授業ではチャット機能を使って行うことができた。

５．結び

今回４名の学生が国境を越えてメディア授業に参加した。筆者にとって初めてのインターネットを介する授業で技術的に慣れるまで時間を要した。また、どのように学習内容をweb会議システムに取り入れ授業を組み立てるか終始模索が続いた。その中で、グループでのディスカッションの方法や誤用訂正の仕方等、メディア授業ならではの特徴を活かした工夫につながり、教師として貴重な経験になった。

また、面識がない学生の間でも相互の学習活動の手助け、クラスメイトから情報を引き出す学習ストラテジーの使用、自律的な学習につながる情報共有が見られ、それらは日を追うごとに増加していく様子が観察された。

一方で、メディア授業を開始してからコンピュータの画面を通しての学習時に違和感を覚えた学生も観察された。確かに、空間の移動をともなわず、瞬時に時間を共有できる学習の機会は便利であるし、アクセスまでのエネルギーも最小で済む。しかし、対面授業では、教師が目の前の学習者に臨機応変に対応したり、学生達が仲間と集い時間と空間を共有することで起こり得る偶発的な出来事からも新たな発見を見い出したりする等の様々な学びにつながる可能性もあり、従来の授業にも良さがある。今後は語学教育において情報機器を用いる機会がさらに増えるだろうが、便利な点のみを捉えて活用せずに、その得失を考える必要性があるのではないだろうか。その上で多様な学びの場が提供されるようになるといいと思う。

今回は、授業後の教師を含む学生間でのコミュニケーションも活発に行われた。学期終了前に学生Ａが自国での待機中に、渡日に対する不安な気持ちを訴えたことがあった。また、チューター制度について、同学生から「活用したほうがいいか」と助言を求められた。来日後、天気が悪いことが気になったようで、「今日は台風ですか」と聞かれたこともあった。このように様々な問い合わせがあったのは、教室での対面授業が開始されるまでは教師が大学との接点になっていたり、身近な存在として感じられたりしたのだろうが、約４ヵ月の間毎週のように

コンピュータの画面を通してコミュニケーションをとってきた教師と学生、また学生間で信頼関係が築かれていたからではないだろうか。

学期終了後にもPadletに学生からの複数の投稿が見られたのは、このコミュニティに愛着を感じてくれているからなのかもしれない。筆者はIT技術には疎いほうだが、メディア授業を経験して、その技術が人と人を結びつけ、学習につながっていくことを実感した。

謝辞

メディア授業を行うにあたって、大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部の村上正行先生、同大学サイバーメディアセンター言語教育支援研究部門の岩居弘樹先生及び大前智美先生に大変お世話になりました。ここに記し、感謝を申し上げます。

注

1）「2020 年度Uプログラム運営概要－U日本語科目（UJPN）について－」大阪大学日本語日本文化教育センター参照

2）Zoomビデオコミュニケーションズは、オンラインの「対面と同等、もしくはそれ以上に充実したミーティングを可能にする豊富なツールを提供」している。https://zoom.us/jp-jp/meetings.html（2020年12月28日閲覧）

3）文部科学省資料「大学における多様なメディアを高度に利用した授業について」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/043/siryo/__icsFiles/afieldfile/2018/09/10/1409011_6.pdf（2020年12月28日閲覧）

4）今年度の春～夏学期のメディア授業に限り今回のような形式で実施することが可能だった。

5）阿部達雄・新城直樹・有田佳代子・植松容子・渋谷実希・志村ゆかり・筒井千絵（2011）『会話の授業を楽しくするコミュニケーションのためのクラス活動40』スリーエーネットワークpp.115-121
活動では、「上手な意見の伝え方」の文章を各自で読み、自分の意見をまとめておく課題を課した。メディア授業ではその準備をもとにしてディスカッションを行った。

6）Padlet https://ja.padlet.com/（2020年12月28日閲覧）

7）文化庁（2003）「情報通信技術（IT）を活用した日本語教育の在り方に関する調査研究」p.20
https://www. bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_suishin/Nihongokyoiku_it/（2020年12月28日閲覧）

参考文献

梅田康子（2005）「学生の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割―学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る―」『言語と文化』第12号　愛知大学語学教育研究室　pp.59-77

大山牧子・松田岳士（2018）「アクティブラーニングにおけるICT活用の動向と展望」『日本教育工学雑誌』42巻3号　日本教育工学会　pp.211-220

オックスフォード・レベッカ L.（1994）『言語学習ストラテジー 外国語教師が知っておかなければならないこと』凡人社

中谷素之・伊藤崇達（2013）『ピア・ラーニング 学びあいの心理学』金子書房

（ふじい みゆき 本センター非常勤講師／東大阪大学講師）

資料

学生のPadletへの投稿

学生Ａの投稿

あしたのテーマについて

金曜日の授業で私はテーマを「はっきり説明していない」と思います。遅刻してすみません。

「もし、過去にタイムトラベルできたなら」はテーマです。
１）タイムトラベルで過去に行って、ただ一つのしゅんかんてきなイベントだけなく、長い間の事も見る、知ると経験できます。例えば：World Warのような事を経験する事もできます。
2)　また、人間のようにただ地面を動いたり見たりだけなく、神様みたいに空から地球を見下ろす事もできます、動画のように 時間の流れもcontrolする事もできます。
3)自分で何かを変える事もできます。

学生Ｃの投稿

ユーチューバーの紹介

前から紹介したいと思っていましたウーチューバーの紹介したいおもいます。
僕は紹介したいのはあらたさんです。
あらたさんはカメラマンでいろいろな面白いこと取っています。
僕はあらたさんを見始めたのは2年前からでちょうどその時アメリカに留学してアメリカ人から面白いインタビュー聞いているのがきっかけでした。

最後にあらたさんのYoutubeチャネルぜひ見てください。